

寶命全形論を読む

令和七年 一月二十六日

青鳳会講師 吉野 久

文中の■紺字は原書を、■緑字は諸注を、■茶色字は筆者の考えを表した部分である。

■緒言

「素問・寶命全形論」は、「靈枢・九鍼十二原」※が世に広まった後の、素問を奉ずる一派の動揺と、「九鍼十二原」を吸収して自らの血と成そうとする動きの表れとして読むと、非常に興味深いものがある。

「靈枢・九鍼十二原」は、言うまでもなく「靈枢(鍼經)」の第一篇として掲げられ、靈枢全体の理念を代表する一篇として書かれている。その理念をごく単純に言えば、○小鍼を以て経脈の気を補寫して病を治療する

○手足の関節に経脈の原穴を認め、これを用いて治療するというものである。

これが書かれた後、素問を奉ずる一派が対抗して書いた諸篇が、「寶命全形論篇第二十五」「八正神明論篇第二十六」「離合眞邪論篇第二十七」だとされており、確かに「九鍼十二原」意識して書かれた篇であることが分る。

筆者はこの中でも「寶命全形論」が最も強い対抗意識を持って書かれたものではないかと感じる。各々の文自体も、「九鍼十二原」の文を下敷きにして書かれているものが多い。それだけでなく、「九鍼十二原」の内容を自らの血と肉に変えようという内動さえもみて取ることができる。

今回は、このような視点から「寶命全形論」を読んでみたいと思うのである。

※靈枢の「九鍼十二原第一」は、現今「九鍼十二原篇」あるいは「九鍼十二原論」と言い慣わされているが、いみじくも多岐元簡が指摘している通り、原書には篇とも論とも記されておらず、そこに古書(漢唐の書)の面目がある。したがって本論でも「九鍼十二原」と称することとする。ちなみに素問の各篇に「論篇」とあるのも、おそらくは王冰の付した文字だと思われる。

Ⅰ 寶命全形論の全体の流れ

① 導入部

黄帝が諸人の悩みに気づき、その解決法を岐伯に尋ねる。

② 「壊府」という恐ろしい疫病(もしくは公害)の登場

岐伯が「壊府」の治療法を述べる・・・よく天地陰陽の創造物を治め、十二節の理(ことわり)を知ること、壮健な身体をつくり、病も克服できる・・・素問の理念

③ 黄帝が虚実の祛法(補法)と吟法(寫法)について問い、それに対して岐伯が五行の相剋について答える・・・不要ではないが、本筋から外れる

(補寫の話が出るのは、②で岐伯が「素問の理念」を述べた時に、「虚実」「補寫」の話が出たからだ、

☆ 鍼が天下に広く示し得るものは五つある・・・論筋から外れているが、非常に真摯な答で、祛法(補法)・吟法(寫法)よりも重要性を感じさせ、強い九鍼十二原批判につながる

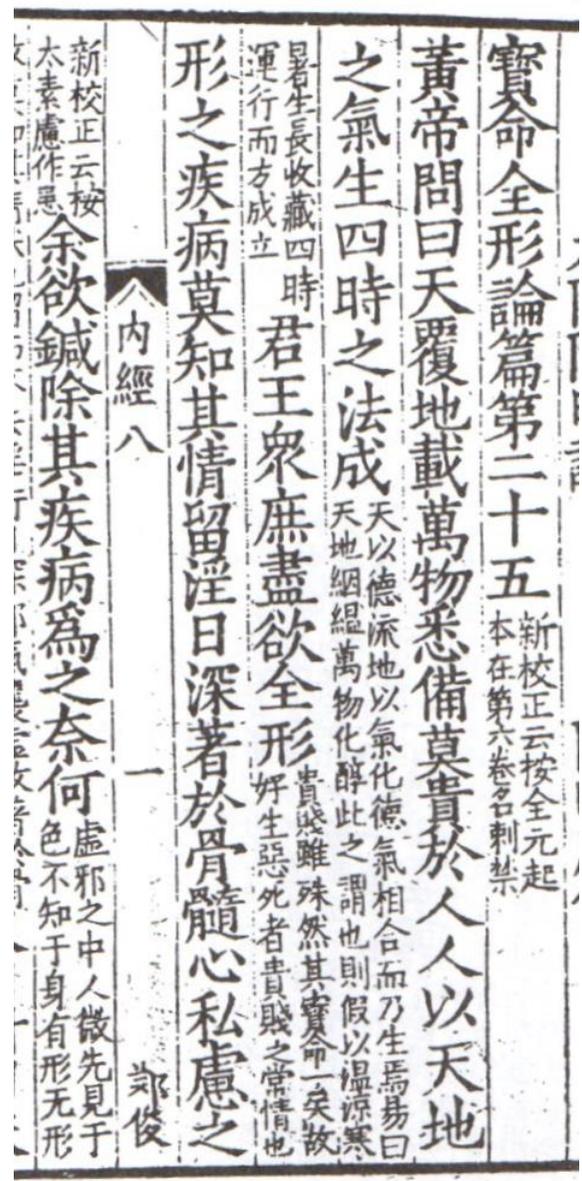
④ 鍼法として近法(寫法)・遠法(補法)が登場する・・・③の祛法(補法)・吟法(寫法)と同じ。この四者は、九鍼十二原の述べている補法と寫法のこと。

⑤ 靈樞・九鍼十二原の虚実に対する刺法の、素問による独自展開・・・素問派による九鍼十二原の書き直し。随所に九鍼十二原を意識した表現が多数現れる。

□ 寶命全形論に於ける個々の問題点

① 導入部

黄帝が諸人の悩みに気づき、その解決法を岐伯に尋ねる。



《読み下し文》黄帝問ふて曰く、天は覆ひ、地は萬物を載せ悉く備ふ。人より貴きは莫く、人は天地の氣を以て生れ、四時の法、成る。君王、衆庶、盡く形、全からむと欲するも、形の疾病するや、其の情を知らず、留淫すること日々深ければ、骨髓に著き、心は私かに之を慮る。余、鍼に其の疾病を除かむと欲す、之を爲すこと奈何。

《現代語訳》黄帝が問うて言うには、天は覆い、地は萬物を載せて悉く準備を整えている。人間より貴いものはなく、その人間は、天地の氣を以て生まれ、四季を司る法（のり）が運行されている。

君王も庶衆も、皆、体が無事であることを望んでいるが、体に病気が起るや、その事情が分らないので、病が留り続けられ、身体の深く骨髓にまで着き、心ひそかに病んだ体に心を悩ませるだけだ。私は鍼を以てその病を除きたいと考えているが、どうしたら良いだろうか。

② 「壞府」という恐ろしい疫病（もしくは公害？）の登場

故莫知其情狀也留而不去淫衍日深邪氣襲虛故著於骨
髓帝矜不度故請行其鍼 新校正云按別本不度作不庶 岐伯對曰夫
鹽之味鹹者其氣令器津泄 鹹謂鹽之味苦浸淫而潤物者也
潤下而苦泄故能令器中水津液潤滲泄焉凡虛中而受物者皆謂之器其於
體外則謂陰囊其於身中則謂膀胱矣然以病配於五藏則心氣伏於腎
中而不去乃為是矣何者腎象水而味鹹心合火而味苦苦流汗液鹹走胞囊
火為木持故陰囊之外津潤如汗而滲泄不止也凡鹹之為氣天陰則潤在土
則浮在人則囊 絃絕者其音嘶敗 陰囊津泄而脈絃絕者診當言音
嘶而皮膚剝起 絃絕者其音嘶敗 嘶敗易售爾何者肝氣傷也
肝氣傷則金本缺金本缺則肺 木敷者其葉發 敷布也言木氣散布外
氣不全肺主音聲故言音嘶 木敷者其葉發 敷於所部者其病當發
於肺葉之中也何者以木氣發散故也平 病深者其聲噓 噓謂聲濁
人氣象論曰藏真散於肝肝又合木也 病深者其聲噓 噓也肺藏
惡血故 人有此三者是謂壞府 行胃胃也以肺處胃中故也壞謂損
如是以納赤餅由此則胃可啓之而取 壞其府而取病也抱朴子云仲景開
病矣三者謂脈弦絕肺葉發聲濁噓 毒藥無治短鍼無取此皆絕

皮傷肉血氣爭黑 病內潰於肺中故毒藥無治外不在於經絡故短
鍼無取是以絕皮傷肉乃可攻之以惡血久與肺

《讀み下し文》岐伯對へて曰く、夫れ鹽の味、鹹しほかららければ、其の氣、器をして津

泄せしむ。絃、絶多れば、其の音、嘶かれ敗る。木、敷ひろがれば、其の葉、發す（廢る、す

たる）。病、深ければ、其の聲、噓えうく。人に此の三つ有れば、是を壞府と謂ひ、毒藥も治すること無く、短鍼は取ること無く、此れ皆な、皮、絶へ肉、傷れ、血氣、争ひて黒し。

《現代日本語訳》岐伯が答えて言うには、塩の味は塩からいので、その氣は腎臟・膀胱から水を滲み出させます。その上に脈が絶えると、声は噓れます。さらに木氣が盛んになると、肺葉が潰れます。さらに病が深ければ、声がしゃくり上げるようになり

ます。この三症状が現れた場合、壞府といい、強い薬でも治すことができず、短鍼を用いた経絡の治療では治すことができません。こうなると皮膚は裂け、肉も傷れ、血気は争って全身が黒くなります。

王冰注：府謂胸也。以肺、處胸中故也。壞謂損壞其府、而取病也。抱朴子云、仲景開胸以納赤餅※3。由此則胸可啓之、而取病矣。

府は胸の謂ひなり。肺を以て胸中を處す故なり。壞とは其の府を損壞する謂ひなりて、而ち病を取る也。抱朴子に云ふ、仲景、開胸して以て赤餅を納むと(心臓の外科手術か?)※3。此れに由れば則ち、胸は啓(ひら)きて病を取ること可なり。

府とは胸のことで、肺を以て胸中の治療をするゆえんである。壞とは府が損壞されることなので、その病を取り除かなければならない。『抱朴子』には、張仲景が開胸手術をして赤餅を納める治療について書いてある※3。これによれば開胸ということが可能であり、これによって病が除かれるのである。

※3 『抱朴子』(317年頃成立、葛洪により著された書物で、「抱朴子」は葛洪の呼び名)至理篇

「越人(扁鵲)は虢の太子を既に殞(し)したる)より救ひ、胡巫は絶氣の蘇武を活(い)かし、淳于は能く顛(かしら)を解きて以て腦を理(をさ)め、元化は能く腹を剗(さ)きて以て胃を漣(あら)ひ、文摯は期(やくそく)のときを愆(の)ばして以て危困を瘳(い)やし、仲景は胸を穿ちて以て赤餅を納(い)る」〔石島快隆訳註・岩波文庫〕

☆恐ろしい疫病に対する黄帝の痛切な嘆き(通常の紋切り型の黄帝の辭とは異なる)

氏解鹽鹹器津義雖淵微至於注絃絶音嘶木敷葉發殊不與帝問相協考之不若楊義之得多也 帝曰余念其痛心 爲之亂惑反甚其病不可更代百姓聞之以爲殘賊 爲之奈何 殘謂殘害賊謂損劫言恐 岐伯曰夫人生於地懸

帝曰く、余、其の痛みを念へば、心、之が爲に亂惑し、反(反省する)すること甚し。其の病、代を更ふる可からず、百姓之を聞けば殘賊(痛ましい)と以爲はむ、之を爲すは奈何。

黄帝が言うには、私はその悲しみを思えば、そのために心は乱惑し、自分の治世を反省するばかりだ。このような病は、次代に伝えるべきではない。どんな民も、この病のことを聞けば痛ましいと思うだろう。一体、どうすれば良いのだろうか。

岐伯が「壞府」の治療法を述べる・・・素問の理念の表明

爲之奈何殘謂殘害賊謂損劫言恐涉於不仁致慊於黎庶也**岐伯曰夫人人生於地懸**
命於天天地合氣命之曰人形假物成故生於地命惟天賦故懸於天德氣同歸故謂之人也靈樞經曰天在我者德地之在我者氣德流氣薄而生者也然德者道之用氣者生之母也**人能應四時者天地**

内經八

二

郭俊

爲之父母人能應四時和氣而養生者天地恒畜養之故爲父母四氣調神大論曰夫四時陰陽者萬物之根本也所以聖人春夏養陽

秋冬養陰以從其根故與萬物沈浮於生長之門也**知萬物者謂之天子**知萬物之根本者謂曰天**天有陰陽人有十二節**節謂節氣外所以應十二月内所以主十二經脉也**天有**

寒暑人有虛實寒暑有盛衰之紀虛實表多少**能經天地陰陽**之化者不失四時知十二節之理者聖智不能欺也

經常也言能常應順天地陰陽之道而脩養者則合四時生長之宜能知十二節氣之所遷至者雖聖智亦不欺侮而奉行之也**能存八**

動之變五勝更立能達虛實之數者獨出獨入呿吟
至微秋毫在目存謂心存達謂明達呿謂欠呿吟謂吟嘆秋毫在目言細必察也八動謂八節之風變動五勝謂五行之氣相

岐伯曰く、夫れ人は地に生れ、天に命を懸く。天地の合氣、之を命けて人と曰ふ。人能く四時に應ずる者は、天地を之が父母と爲す。人、能く四時に應ずる者は、天地を之が父母と爲す。萬物を知る者は、之を天子（天命を受けて天下を治める君主）と謂ふ。天に陰陽、有りて、人に十二節、有る、天に寒暑、有りて、人に虚實、有るなり。能く天地陰陽の化を経る者は、四時を失はず。十二節の理を知る者は、聖智も欺（まさ）る、こえる（楊注による）る能はざる也。能く八動の變、五勝の更立を存し、能く虚實の數に達する者は、獨り出で、獨り入り、呿吟も至微なりて、秋毫は目に在り（細かいところまで見えている）。

岐伯が言うには、人というものは地に生れ、天に運命を委ねています。したがって、天地の合気が人であると言うことができます。よって、四時の法則通りに生きられる者は、天地を自分の父母とすることができます。万物について知る者は、これを天命を受けて天下を治める君主である天子とすることができると言えます。天に陰陽があるように、人は外に十二月を有し、内には十二経脈を有しています。天に寒暑があるように、人には虚実があります。天地陰陽の創造物を治める者は、四時の法則を取り違えることはありません。また一年十二月、人にあつては十二経脈の理に通曉している者に対しては、聖智と呼ばれる存在であつても超えることはできません。八節の気の変化、五行の気の交々旺ずる機を捉える事ができ、また虚実に対する補寫の技術に通曉している者は、誰にも知られることなく幽冥の境を出入りすることができ(ただ一人だけが鍼をもつて気を出しへ瀉へ、気を入れるへ補へことができ)、口のごくわずかな動きも見逃さないように、病人の変化のごく微細なところまで見えていなければならぬのです。

③ 岐伯が、鍼が天下に広く示し得る五つのものについて述べる☆

不可勝竭

達通也言物類雖不可竭盡而數要之皆如五行之氣而有勝負之性分爾

故鍼有懸布天

下者五黔首其餘食莫知之也

言鍼之道有若高懸示人彰布於天下者五矣而百姓共知

餘食咸棄蔑之不務於本而崇乎末莫知真要深在其中所謂五者次如下句新校正云按全元起本餘食作飽食注云人愚不解陰陽不知鍼之妙飽食終日莫能知其妙益又太素作飲食揚上善注去黔首共服用此道然不能得其意

一曰治神 專精其心不妄動亂也

營於衆物蓋欲調治精神專其心也 新校正云按揚上善云存生之道知此五者以爲攝養可得長生也 魂神意魄志以爲神主故皆名神欲爲鍼者先須治神故人無悲哀動中則魂不傷肝得無病秋無難也無怵惕思慮則神不傷心得無病冬無難也無愁憂不解則意不傷脾得無病春無難也無喜樂不極則魄不傷肺得無病夏無難也無盛怒者則志不傷腎得無病季夏無難也是以五過不起於心則神清性明五神各安其藏則壽延遐筭也

內經八

三

張詢

知養身

知養已身之法亦如養人之道矣陰陽應象大論曰用鍼者以我知彼用之不殆此之謂也 新校正云按太素身作形揚上善云

飲食男女節之以限風寒暑濕攝之以時有異單豹外凋之害即內養形也實慈愍以愛人和塵勞而不迹有殊張毅高門之傷即外養形也內外之養周備則不求生而久生無期壽而長壽此則鍼布養形之極也玄元皇帝曰太上養神其次養形詳王氏之注專治神養身於用鍼之際其說甚狹不若上善之說爲優若必以此五者解爲用鍼之際則下

二曰知毒藥爲真 毒藥攻邪順宜

四曰制砭石小大 古者以砭石爲鍼故不舉九鍼但言砭石爾當制其大小者隨病所宜而用之

新校正云按全元起云砭石者是古外治之法有三名一砭石二砭石三砭石其實一也古來未能鑄鐵故用石爲鍼故名之砭石言工必砥礪鋒利制其小大之形與病相當黃帝造九鍼以代砭石上古之治者

氣之診

諸陽爲府諸陰爲藏故血氣形志篇曰太陽多血少氣少陽少血少氣多氣陽明多氣多血少陰少血多氣厥陰多血少氣太陰多氣少

故に鍼の天下に懸け布がる者、五有るも、黔首共に食を餘らせ、之を知ること莫き也。一を神を治むと曰ひ、二を身を養ふを知ると曰ふ、三を毒藥、眞を爲すを知ると曰ひ、四を砭石の小大を制すと曰ひ、五を府藏の血氣の診を知ると曰ふ。

故に鍼が天下に広く示し得るものは五つあるが、現今の庶民は飽食することを知つてしまい、この五つなど気にもかけない。

その第一は、鍼師が精神を平らかに治めるといふことです。第二は、身を養うということを知ることです。第三は、強い薬が本当の効きめを持つていることを知ることです。第四は、砭石の小大を見極めて、よく使いこなすことです。第五は、府藏の血氣の診断を確実につけるということです。

ここでは、鍼法だけでなく、養身(養生)、毒薬についても触れている。

血是以刺陽明出血氣刺太陽出血惡氣刺少陽出血惡血刺太陰出血
氣惡血刺少陰出血惡血刺厥陰出血惡氣也精知多少則補寫萬全
五法
俱立各有所先事宜則應者先用今末世之刺也虛者實之滿
者泄之此皆衆工所共知也若夫法天則地隨應而
動和之者若響隨之者若影道無鬼神獨來獨往隨應

五法、俱ともに立てば、各々先とする所、有るも、今は末世の刺なり。

『九鍼十二原』のいう小鍼で經氣を調整するだけでなく、毒薬や砭石も含めたこの五つを運用することができれば、何が主要な治療法かが分ろうというものですが、今の小鍼にたよる鍼治療というものは末世の鍼です。

二※三部九候爲之原、九鍼之論不必存也。へ八正神明論26<

三部九候を之が原と爲せば、九鍼の論は必ずしも存(のこ)らざる也。

三部九候脈診とそれによる治療を根本とすれば、靈枢の説く九鍼を用いた鍼法などは、必ずしも残さなければならぬものではない。

※条文の番号は、筆者運営サイト「枳竹鍼房」による。各篇のURLは論末に記してある。

これは靈枢・九鍼十二原に対する批判である。

☆ 虚する者は之を實し、満つる者は之を泄らすは、此れ皆な衆工の共に知る所なり。若し夫れ天に法らば、則ち地は隨ひ應じて動き、之に和す者は響くが若く、之に隨ふ者は影の若し。道に鬼神無く、獨り來り獨り往く。

『靈樞』に書いてある「虚する者は之を實し、満つる者は之を泄らす」の文句はどんな鍼師も諳んずるところとなつたが、天の法則に順うなら、地は隨ひ應じて動き、これに和す者ば響くように、これに隨う者は影のようになるものです。この道には手助けしてくれる怪しい鬼神などなくとも、人はまったく独力でこの世界を進み往くことができるのです。

九鍼十二原を批判し、素問の理念を強く表明している。

④-1 具体的な鍼法 近法(近速⇨寫法)・遠法(遠遲⇨補法)

於人也玩謂玩弄言精熟也標本病傳論曰謹孰陰陽無與衆謀此其類也
有虚實五虚勿近五實勿遠至其當發間不容曠新校正云按此文出陰陽別論此云標本病傳論者誤也
之

近 時間的にちかい、迫っている

遠 時間がながい、久しい

人に虚實有れば、五虚は近(近速の刺法⇨寫法)をする勿かれ、五實は遠(遠遲の刺法⇨補法)をする勿かれ、其の當に發せむとするに至らば、間に□(日+寅、まばたき)※を容れず。

病人には虚實というものがあるので、五藏が虚の場合は『靈樞・小鍼解』にいう近速の刺法、五藏が實の場合は遠遲の刺法は、してはなりません。鍼の効果はたちまち現れるので、瞬きをしている暇ありません。

具体的な鍼法として述べられているが、これは九鍼十二原の焼き直しである。

靈樞・九鍼十二原 二二※ 刺之微在速遲、麤守關、上守機。機之動、不離其空。空中之機、清靜而微。

※条文の番号は、筆者運営サイト「枳竹鍼房」による。各篇のURLは論末に記してある。
刺の微は速遲に在り。麤(そ)は關を守り、上は機を守る。機の動くや、其の空を離れず。空中の機は、清靜にして微なり。

粗工は關節にある原穴の位置にだけこだわるものだが、上工は鍼の刺抜や運鍼のタイミングや、氣の往來する氣配を大事にしている。

弩(いしゆみ)の発射装置が動いて矢が発射される時には、無心を心がけねばならない。「氣が廻ってくる氣配が感じられた時には、無心を心がけねばならない」

「刺抜や運鍼のタイミングが至るに際しては、無心を心がけねばならない」
無心の心で知ることのできる氣の兆しや、鍼のタイミングとは、清靜にして微(かす)

かなものだ。

⑤ 1-2 靈枢・九鍼十二原の刺法を独自に消化し、発展させようとする試み

7-2a※ 凡刺之眞、必先治神、

岐伯曰く、凡そ刺の眞は、必ず先づ神を治め、

岐伯いわく、およそ鍼の眞は、まず治療者が自分の精神を集中させるところから始まります。

7-2b 五藏已定、九候已備、後乃存鍼、衆脈不見、衆凶弗聞。

五藏、已に定り、九候、已に備り、後ち乃ち鍼、存らば、衆脈、見はれず、衆凶も聞こゑず。

五藏の診断が決定し、三部九候の脈診結果も決まった後に鍼をはじめれば、七死脈もなく、相乗、相侮といった不正な五藏関係も認められなくなります。

7-2c 外内相得、無以形先、可玩往來、乃施於人。

外内相ひ得るも、以て形を先にすること無く、往來を玩(め)づること可ならば、乃ち人に施す。

患者の体の内と外に現れている様が相い合うようになっても、体外の表相だけにたよらず、気が来ているのか、退いているのかを玩味できるようになったら、病人に鍼をしてもよいと言えます。

※条文の番号は、筆者運営サイト「枳竹鍼房」による。各篇の URL は論末に記してある。

31※ 持鍼之道、堅者爲寶。正指、直刺、無鍼左右。神在秋毫、屬意病者。

33 方刺之時、必(心一甲乙)在懸(鼻筋)、陽(眉の上下)、及與兩衛(額)。神屬勿去、知病存亡。

31 鍼を持する道は、堅きを寶と爲す。指を正し、直く刺せ、鍼を左右すること無かれ。神は秋毫に在れ、意を病者に屬めよ。

33方に刺さんとする時、心は懸、陽、及び兩衛とに在り。神を屬め、去ること勿らしめば、病の存亡を知らん。

※条文の番号は、筆者運営サイト「枳竹鍼房」による。各篇の URL は論末に記してある。

7-3a 人有虚實、五虚勿近（||速_{||}瀉法）。五實勿遠（||遲_{||}補法）。至其當發、間不容□（日十寅）。手動若（した_がゝ）務、鍼耀而勻（ととのゝ）、靜意視義、觀適之變、是謂冥冥。莫知其形、見其烏烏。見其稷稷、從見其飛、不知其誰。伏如橫弩、起如發機。

人に虚實有れば、五虚は近（近速の刺法・瀉法）をする勿かれ、五實は遠（遠遅の刺法・補法）をする勿かれ、其の當に發せむとするに至らば、間に□（日十寅、まばたき）を容れず。手を動（ゆら）して務めに若（したが）へば、鍼、耀きて勻（ととの）ふ。意を靜（きよ）め義を視、適ふ變を觀よ、是を冥冥と謂ふ。其の形を知らざれば、其れ烏烏を見、其の稷稷の見はるるも、其の飛ぶを見るに従ひて、其の誰（なに）かを知らず。伏すこと横弩の如く、起つこと發機の如し。

病人には虚實というものがあるので、五藏が虚の場合は近速の刺法、五藏が實の場合には遠遅の刺法は、してはなりません。鍼の効果はたちまち現れるので、瞬きをする暇もありません。刺し手を動かして治療に務めれば、鍼を揺らす瀉法となり、患者の容体も調います。自分の気持ち（静（きよ）めれば、病人の容体の意味を探ることは無意味だと分ります（王注に従う）。病人の治療に適う変化を見つけたことが第一で、これは全く目には見えないものです。その表に現れて来るものが分らないので、病人が呻いているのを見ているだけであり、次にそれが素早く変わる機があっても、その立つ鳥のようなものが何なのか分らないのです。それは正に横弩のごとく伏しているものですが、矢が放たれる勢い（ご存じの通り）です。

15 知機之道者不可掛以髮、不知機道、叩之不發。知其往來、要與之期。

機の道を知れば、髮を以て掛くる可からず、機の道（た）を知らざれば、叩（た）けども發さず。

其の往來（かなら）を知り、要（あつ）か之が期（あつか）に與れ。

8-2a 刺虚者須其實、刺實者須其虚。經氣已至、慎守勿失。

岐伯曰く、虚を刺すは其の實するを須（ま）ち、實を刺すは其の虚するを須つ。經氣、已に至らば、慎（ま）しみ守りて失ふこと勿れ。

岐伯が言うには、虚の病人を刺すには実になるまで待たなくてはなりませんし、実の病人は虚すまで待ちます。経脈の気が巡ってきたら、慎んでこれを守り、散ってしまふことがないように。

20 凡用鍼者虚則實之、満則泄之。

凡そ鍼を用ゐるは、虚すれば之を實し、満つれば之を泄らす。

8-2c 深淺在志、遠近(補法と寫法)若一。如臨深淵、手如握虎、神無營於衆物。

深淺に志、在らば、遠近、一に若^{したが}ふ。深淵に臨むが如く、手に虎を握むが如く、神を衆物に營^{まじ}はず無かれ。

自分の意識を浅くにも深くにも同一に在らしめれば、補法も寫法も思うままにできません。深淵に臨む如く、虎を捕まえているときの如く注意を払い、精神を他のことに迷わせてはならないのです。

9 刺之要、氣至而有効、効之信、若風之吹雲。明乎、若見蒼天、刺之道畢矣。

刺の要は、氣、至らば効、有り、効の信^{しるし}は、風の雲を吹くが若し。明らかなるかな、蒼天を見る若し。刺の道、畢^{をは}んぬ。

刺鍼の要は、氣が至れば有効だということである。その徴(しるし)は風の雲を吹き払う如くである。それは明らかで、蒼天の現れるが如くである。刺の道についてを畢る。

【結語】

「壞府」という恐ろしい疫病(もしくは公害)の治療を實現しなければならぬが、小鍼を以てしては不可能だという現実に際して、一世を風靡していた靈枢派の小鍼治療が無効だということになり、一挙に「九鍼十二原」が批判されることになったのである。

実際のところ、「壞府」の治療は、毒薬(と手術)を以てしなければ不可能だった。

素問学派としては「天地に合一すること、あらゆる病を克服できるという理念がある。

しかし、「鍼治療」を放棄しないなら、「靈枢・九鍼十二原」に述べられている補寫法をまねた呿法(補法)・吟法(寫法)や近法・遠法を独自に産み出さねばならなかったのである。

「能く天地陰陽の化を経る者は、四時を失はず。十二節の理を知る者は、聖智も欺(まさる、こえる)能はざる也」(5頁)

「若し夫れ天に法らば、則ち地は隨ひ應じて動き、之に和す者は響くが若く、之に隨ふ者は影の若し。道に鬼神無く、獨り來り獨り往く」(7頁)

という力強い素問の理念の宣言が所々にはあるものの、靈枢の補寫法を完全に否定することはできないまま、「九鍼十二原」の文を書き直しながら、素問派の論が続いて終るのである。

※素問のテキストは、日本内経医学会版を用いた。

※「枳竹鍼房」中の、素問、靈枢の各篇 URL

素問・寶命全形論 https://kien-youchiku.tokyo/somon_25_houmeizenkei.html

素問・八正神明論 https://kien-youchiku.tokyo/somon_26_hasseishirimei.html

靈枢・九鍼十二原 https://kien-youchiku.tokyo/reisu_01_9-12_1.html